

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 33

オタクがつなぐ日本とイタリア

深草 真由子

日本のポピュラーカルチャーが海外でたいへん評判であることは、みなさんもよくご存じであろう。そこから日本文化全般へと関心を広げていったという人も少なくない。ゲーム開発を学ぶエンジニアの卵が、日本語の習得にチャレンジすることもあれば、「ビデオゲームは芸術だ」と熱弁するナード(オタク)の愛読書が、『奥の細道』だったりする。

だから、日本を訪れる外国からの観光客と言葉を交わす機会があれば、武士道や侘び寂びといった伝統文化だけでなく、サブカルを話題にしてみてもいい。「実はぼく、日本のアニメを見て育ったんだ」。そう言って、目を輝かせる人がかならずいる。だからぜひ知っておきたい。アニメはイタリア語でなんと言う？ マンガは？

辞書には、アニメは *cartoni animati*、マンガは *fumetto* とある。でももしあなたの話し相手が正真正銘のマニアなら、目を大きく見開いて Noooooo!!!!!! と叫ぶにちがいない。そしてちょっとあきれたようすで言うだろう。「アニメは *anime*、マンガは *manga*」と。

そう、イタリアのオタクたちにとって、日本のアニメは *anime*、日本のマンガは *manga* なのである。日本発のものは、画のスタイルやストーリーの構成において、欧米の *cartoni* や *fumetto* とは大きく異なる。物語の舞台も人物の言動や感情の動き方も、すべてが新しい。彼らにとってアニメとマンガは別の世界に開かれた窓のようなものだ。



【Kunoichi dragon-koi (イラスト Marco Serravalle)】

(イタリア人漫画家によるマンガ文化受容の一例)

ところで、日本のアニメとマンガにハマるイタリア人って、一体どんな人？ そんな疑問に答えるべく、筆者の友人のなかでもオタク度の高い二人を、ここで紹介しようと思う。彼らも、自分たちの熱い

想いが少しでも日本に届くことになれば、きっと喜ぶだろう。

まず一人目はフランチェスカ。彼女はローマのマンガ専門学校に入学したほどのマンガ好きで、マンガ風のイラストを描くのがとてもうまい。

実家に戻り、仕事探しに苦戦していたころは、朝から晩まで家にこもってアニメ漬けの生活を送っていたらしい。その結果、おそらく何かの萌え系キャラから学んだのだろう、聞いているこちらが照れてしまうくらいにカワイイ日本語を覚えてしまった。それはスタンダードな日本語の学習にも役立っていて、文法はもちろん、みんなが苦労するリスニングも、彼女はばっちりである。

マンガや関連グッズを大量にもっているのは言うまでもなく、日本語の書かれたカップ麺の空容器さえも、東京タワーのように高く積みあげて、大切に残している。

フランチェスカはこの春、街のコミック専門店を知りあった彼と結婚した。一年以上かけて準備したという披露宴は、自分で翻訳した俳句をメッセージにして配ったり、オーナメントを折り紙でこしらえたり、ウェディングケーキに桜の花を飾ったり、あちこちで彼女の〈日本好き〉が感じられるもの。余興では、映画『君の名は』の主題歌を日本語で熱唱し、筆者をはじめ、何も知らない招待客をびっくりさせた。

フランチェスカは「イタリアで一番ステキな街はルッカよ〜」とよく言うのだが、その理由は尋ねるまでもない。毎年11月のはじめにオタク文化をテーマにしたイベント Lucca Comics and Games が開催されるからだ。

イタリア各地からルッカ行きのツアーが組まれるほどの大盛況ぶりで、そこに行くと、有名なマンガ家のサインをゲットしたり、アニソン歌手の生歌を聞いたり、ビデオゲームのトーナメントに参加したりすることができる。

一番の見所は、コスプレイヤーたちのパフォーマンスだろうか。手作りの衣装を着てルッカの旧市街をうめつくす彼らは、たとえ見知らぬ者同士であっても、たとえばハクとカナオシのコスプレイヤーが出会えば『千と千尋の神隠し』つながりで

すぐに意気投合するといった具合に、たいへん陽気である。

もちろん、フランチェスカもそんなコスプレイヤーの一人で、「たのしそうだね」とこちらが声をかけると、“Cosplay è anche amicizia”と言ってウインクをしてくれる。



【ルッカ・コミックスのコスプレイヤー】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Lucca_Comics_%26_Games_2013

もう一人は、学校の先生をしているアントーニオ。アニメが大好きなことで、演劇をライフワークにしていることから、熱が高じてアニメを題材にしたミュージカル Ethicus を作った。

地元で話題になったそのミュージカルは、コミカルなタッチのものでありながら、表現の自由と検閲というシリアスな問題を扱っている。

主人公はアニメ作家のジャンニ。

これまでいくつかの作品を製作してきたものの、商業的な成功には恵まれなかった。イタリアでは、アニメは子どもが見るものとされている。だから、児童向けのコンテンツを作るのがアニメ作家の主な仕事である。けれどもジャンニがやりたいのはそれではない。彼が志すのはアニメ創作を通しての〈表現〉である。

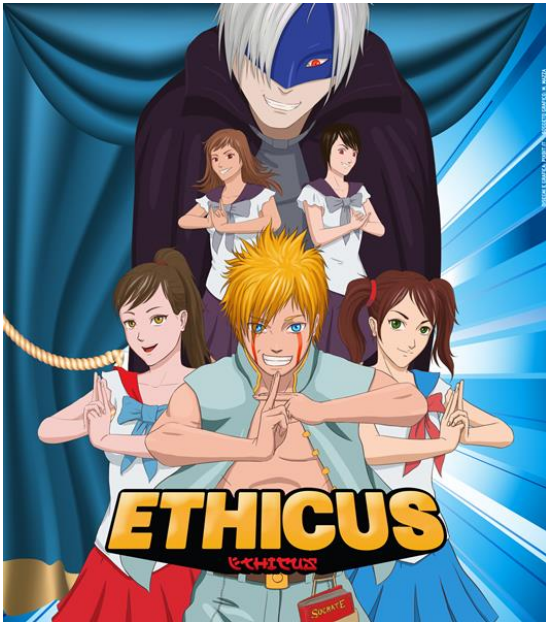
そんな彼の最新アニメが、メディアセット(シルヴィオ・ベルルスコーニが保有するテレビ会社)によって購入されることになった。その作品のタイトルが、“Ethicus”。〈倫理〉をふりかざす者たちから個人の自由を守る、正義のヒーローが活躍するアニメである。

ジャンニはアーティストとしての才能がついに認められたのだと思って大喜びする。

待ちに待った最初の放映日がやってきた。

“Ethicus”の第一話は、治る見込みのない病に冒された少年のエピソードである。彼は安楽死を望んでいるのだが、病室では担当ドクターが延命治療の準備をすすめている。

そこに正義のヒーローがあらわれ、少年の〈死を選ぶ自由〉を守るため、その医師 —そして、安楽死を認めないカトリック教会と、世俗国家でありながら教会の意向に左右されるイタリア— を、ソクラテスにかわってお仕置きする、、、はずだったのだが、放送されたのは、それとはまったく展開の異なるもの。安楽死はタブーだからという理由で、当たり障りのない内容に変更されてしまったのだ。



【Ethicus のポスター】

「これは検閲だ」と憤るジャンニは、ある晩、テレビ局に侵入し、“Ethicus”のオリジナル・ヴァージョンを無断で電波にのせる。それが、司祭の前にひざまずいた元首相がこれまでに犯した罪の数々 —汚職や児童買春— を告白するというエピソードだったから、当然、大問題に発展してしまう。

はたしてジャンニは己の信じる〈アニメ道〉を貫くことができるのだろうか…。

アントーニオによれば、日本から輸入されたアニメの表現規制は、とりわけ 90 年代半ばから

2000 年にかけてかなり厳しくなり、原作にあった暴力や性にまつわる描写の多くに手が加えられたという。それも、たとえばアニメ「ドラゴンボール」で、ブルマのお色気シーンはカットされたにもかかわらず、そのあと亀仙人が鼻血を噴き出すところはそのまま残っているという具合に、フィルムにはさみを入れたことによって、前後関係がさっぱり分からなくなることもままあったらしい。

それから同性愛が好ましくないものとされ、同性間の友情に置き換えられたりもした。だから、セーラー服美少女戦士のなかに百合界のカリスマが存在することを、イタリアの視聴者は知らなかったのである。

同性カップルに結婚に準ずる権利がイタリアで認められたのは 2016 年のことだから、セーラーームーンは 20 年も時代を先取りしていたというわけだ。

ときには私たち日本人をおどろかせるほど、日本をよく知るイタリアのオタクたち。異文化に接し、心をひらいてそれを受け容れる彼らの存在は、違いを憎み、排除しようとする風潮の強まるこの時代において実に尊い。

現実の世界がこれからも夢をみることのできる場所でありつづけるよう、文化交流に貢献してくれているすべてのオタクたちへ、Grazie!

※本文中で紹介している Ethicus の舞台の様子が youtube でご覧いただけます。

Ethicus (Antonio Malfitano e Compagnia delle stringhe, 2013)

https://www.youtube.com/watch?v=NwTr6TwCte8&t=3238s&fbclid=IwAR0_TvSmpEdCgJn2SuYMs5l5B0-pVYogDqmo7Q_5JxkHdyEeRWqw9ZMFsc

(元当館スタッフ)

イタリア食文化紀行

～ポンペイ編～

岡本 勇志

10 日間の一人旅を始めて 2 日目、ナポリでの朝を迎えた。今日はナポリからさらに南の街ポンペイを目指す。有名なポンペイ遺跡と、火山灰の土壌で作られたワインを目当てに。

支度を済ませ、ホテルのオーナーに挨拶し、朝のナポリの町へと繰り出した。

都会の朝と田舎の朝では同じイタリアでも全く景色が違う。私が一年間働いていたトーディでは小鳥のさえずりの中、広場に向かう老人や子供たちや、いつものバールでいつもの時間にカプチーノを飲む人など、とにかく穏やかでゆっくりとした朝であった。これに対しローマやナポリといった都会の朝は違う。車が行き交い広場ではビジネスマンがセカセカと地下鉄やバスを目指し早歩き。バールではぶっきらぼうにコーヒーの小皿を置く音が響き渡る。私はどちらも好きである。どちらもイタリアらしい。

ナポリの忙しいバールに堂々と入り、ぶっきらぼうに置かれたカプチーノを流し込んだ。イタリアではこのぶっきらぼうさが良いのだ。日本では考えられないほど雑で愛想もないバールの店員がいかにもイタリアらしい。『なんと愛想の悪い！』などと怒るイタリア人は一人もいない。雑に置かれたエスプレッソをさっと飲み、1ユーロほどをカウンターに置き『Grazie』と一言言って立ち去る人もいれば、バールの店員相手にサッカーの話や世間話をたとえ聞いていなくても一生懸命話す人、その話に横から口出す人など様々で、それが一つの空間の中で一体化し、独特のイタリアらしさになるのである。

さて、そんなイタリアらしさをあとに、ナポリ中央駅へ向かった。

ナポリ中央駅からポンペイまで電車で小一時間といったところ。乗り換えもなく問題なくポンペイへ到着するはずだった。が、ここでまたもやハプニングが起こった。

ポンペイ行きの列車と時間を調べ、ホームで待っていた。このホームには二種類の電車が来るようになっていた。ただ、どちらがポンペイへ行くのかがわからなかった。そこで時刻表どりの時間に来た電車に乗ったのだが、これが失敗だった。

この電車はポンペイがある南の方向に行かず、東に進んでいたのである。しかし乗った直後はそれに気づかずポンペイにつくものだと思いこみ座っていたのである。なぜ気づくことができたのか？イタリアの電車は乗ると必ず車掌さんが電車の切符を確認しに来る。乗車して 20 分たつところに車掌さんが私の切符を見て『お前まさかポンペイへ行くつもりかい？』と聞かれたので、『はい！』と元気よく答えると、『今すぐおりて、ナポリに戻って、乗りなおせ！』と言われた。

おっと、やってしまった。しかし不思議と焦りはなかった。また戻ればいいや。そんな感じですぐに次の駅で降り、向かいのホームで電車を乗り換えナポリ駅へ帰ることに。

ここで 2 回目の試練が襲いかかる。

ベンチに座り携帯で調べものをしている時に、ふと横を見ると、アフリカ系の男性と目が合った。明らかに雰囲気「まずい」と思った。すぐに目をそらしたが、『Ciao, amico !!』『ヘイ！ブラザー！』とイタリア語と英語両方で呼びかけてきた。頑なに無視して、イヤホンをつけ聞こえていないふりを貫いた。それでもなお声をかけ続けている様子だった。初めてのナポリ、電車を間違え見知らぬ街の駅のホームでアフリカ系の男性からひたすら声をかけられるという、地獄のような時間だった。

少して彼の恋人らしき女性が現れ、私に声をかけ続けている様子に「もうやめなさい」というニュアンスのことをアフリカの言葉で言い、ようやく彼は私に声をかけるのをやめた。その彼女が現れるまでの数十分は忘れられない経験だ。

さて無事にナポリ駅に戻る電車に乗り、ナポリ駅からポンペイへ向かう電車に無事に乗り継ぐことができた。

ポンペイの駅を出ると、ここでまた雰囲気の違いに驚かされた。ナポリのような喧騒はなく、のんびりとした穏やかな街だった。ハプニングのおかげで午前中に着くはずが昼過ぎの到着となった。とりあえずホテルのチェックインまでだいぶ時間

があるのでポンペイ遺跡を目指すことにしたが、とにかくお腹が空いていた。レストランを探そうと遺跡の方へ歩いていると、感じの良い小さなレストランを発見した。

『とりあえずここでいいか』と店に入り、メニューを見ると、『antipasti misti crudi』と書いてあった。『生や！！遂にイタリアで生の魚が食べられる！！』そう、これは生の前菜の盛り合わせ。つまり日本でいうところのお刺身盛りである。イタリアで生の魚は海沿いの街に行かないと食べられない上に、ことに私は中部イタリアで生活していたので、イタリアに来て以来、生の魚に飢えていたのである。



【ポンペイの海鮮盛り合わせ】

あまりに嬉しくて、メニューを見るなり、すぐに注文した。他にイワシとトマトのパスタを注文。

そしてワインリストに念願の Tufo ワインを発見。Greco di tufo を注文した。

Greco di tufo は、凝灰岩 (tufo) の土壌で育てられたグレコという葡萄品種で作られたワイン。日本でも手に入るが、カンパーニャ州原産で南イタリアの代表的なワインである。

さっそく前菜が到着。思った通り、全て生の魚介の盛り合わせ。赤海老 (gambelone)、手長海老 (scampo)、牡蠣 (ostrica)、そしてマグロ (tonno) が盛られていた。

もちろん醤油はなく、レモンとその土地のオリーブオイル、そして生イタリアパセリで食べる。これが最高に美味かった。注文したワインとの相性も完璧だった。海老を口にしてワインを一口含んだとき、海の香りに、さわやかなレモンと柑橘の味が加わった。それでいて、ずっしりと飲みごたえ

のある感じ。最高だった。パスタも美味しく、いずれの料理にもワインがマッチした。

よくイタリアでは、ワインは同じ土地の食材や料理と合わせるのが一番美味しいというが、まさにその通りだった。もし、この前菜にウンブリア原産のグレケットやトレヴィアーノなどといった白ワインを合わせても絶対に合わない。ワインの風味が強すぎて、生の魚と喧嘩してしまう。

逆にこのグレコをウンブリアの生ハムやサラミ、チーズと合わせても、食材の味が強すぎてワインと喧嘩してしまう。やはり同じ土地の食材とワインが一番合うのである。

南イタリアの食事を堪能し、遺跡へと向かった。

フラフラとほろ酔いで歩く。酔いのせいかあまりにも長閑なせいか、少し眠たくもなる。そんな感じで遺跡に到着。広大な公園のような施設に、火山の噴火により一瞬で消えたポンペイ都市がそのままの形で残っていた。中に入り遺跡を見学。敷地内はものすごく広く、お墓や家、門、銅像など、一つの都市がそのままの形で残っていた。

写真を撮りながら散策していると、前方にアジア系の観光客の団体を発見した。そろりと近づくと日本人の団体だった。イタリア人のガイドさんが日本語で詳しい遺跡の説明をしていた。ガイドさんの説明を小耳にはさみつつ、遺跡を散策した。こんなにも大きな都市が火山の噴火で一瞬に消え去ってしまったという恐ろしさで人間の運命の儚さを感じつつ、ホテルへ向かった。

ホテルの近くでホテルのオーナーに電話した。すると、近くの公園で待つようにと言われた。やはり緊張する。どんなホテルなのか、どんなオーナーなのか。言われた通り公園で待っていると、優しそうな若い男性がやってきて声をかけた。そして公園の近くのホテルへ案内してくれた。とても親切な人で、部屋も綺麗。大きな安堵感に包まれた。

ホテルのオーナーに夕食のレストランを紹介してもらってから、この日はよく歩いたのでホテルで一休みすることにした。30分ほど仮眠し、またもやポンペイの街へ繰り出した。

私はまず必ずドウオーモを探す。自分なりのこだわりで、その街のドウオーモに行くと、街に挨拶しているような気持ちになるのである。ポンペイの

教会は素朴で派手さはなく落ち着いた感じがした。

ドゥオーモ前の広場には小さいが噴水があり、小さな子供達やお年寄りの方で賑わっている。



【ポンペイのドゥオーモ】

少しベンチに座り、何を考えるというわけでもなく、ぼんやりと景色を眺める。私はこれが好きだ。旅の醍醐味と言っても良い。観光名所も良いが、その街の日常を眺めるというのが一番その街の雰囲気を楽しむことができると思う。

さて、夕食の時間になり、レストランへ向かう。雰囲気の良いレストランで、魚介の前菜に手長海老の手打ちパスタ、魚介のグリル、それにヴェスビオという、これまた凝灰岩の土壌でできた白ワインを堪能した。久方ぶりの海鮮尽くしで、最高に美味しかった。

贅沢な海鮮料理を食べ、夜のポンペイへ。

ナポリのように騒がしくなく、きっと毎日同じ顔ぶれで賑わっているに違いないソールがあり、どこか温かい、そんなポンペイの中心街。

夜のドゥオーモの前に座る。ドゥオーモは何も語らない。でも、なんだか背中を押してくれるような気がした。見るものといえば遺跡しか無いポンペイ。それでもポンペイの街の温かさや雰囲気、それを全身で感じ、舌も心も満足したポンペイ滞

在だった。

さあ、明日はまたナポリへ戻り、もう一泊ナポリで過ごそう。まだまだ未知なナポリへの大きな期待と、温かく迎えてくれたポンペイへの感謝を胸に、ホテルへと戻った。

～レストランご紹介～

京都下鴨 ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。これからの季節、名物のタンシチューがおすすめです。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101

アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」

下車 目の前

Tel: 075-781-0028

HP: <https://www.botechin.com>

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
(特典期間：2019年11月末まで)



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>